

## 4章 研修プログラム作成例

ここでは、具体的な研修プログラムの作成例を示します。全体の構成は、実態把握から研修の企画・立案段階までの手順、次に研修の全体の計画作り、そして各回の実際の研修プログラムの例です。これらの事例をひな形にして、実際の研修を組み立てる手がかりにしてください。

### 1. プログラム作成例1—分散地域の「日本語学級担当者（経験者）」研修

#### (1) 実態把握と企画・立案

1 現状把握	地域の特性	分散地域。中国・韓国系児童生徒が多いが、多国籍・多言語環境である。こうした児童生徒の受入れに慣れた学校も多いが、同じ地域でも初めてという学校もある。就労目的で長期滞在が多い。ただ、大使館や企業の勤務者、さらには留学など外国人の層も多様であり、そうした場合には3年程度の滞在期間である。
	ニーズ	学習支援・適応支援等・通訳支援等が要望されている
	地域のリソース	複数の小学校・中学校に日本語学級が設置されている。 NPO、大学、日本語学校などもある。
2 企画立案	研修の位置づけ	日本語学級担当者研修
	受講対象者	小中学校・日本語学級担当3～4年経験教員
	研修回数・時間	年間3回（1回3時間程度）
	その他	大学教員講師 2回 日本語学級教員 2名×2回
3 研修項目の選択	<p>検索項目 項目一覧から、「日本語学級担当者」「教員経験あり」で、◎印を選択した。</p> <p>※赤の項目が 研修内容になる。</p>	<p>I - 3 児童生徒との関係づくり 1-3-3 支援の必要性和意義 1-3-4 日本人児童生徒への働きかけ</p> <p>I - 4 外国人児童生徒にとって「日本語で学ぶ」とは 1-4-1 日常会話と学習言語能力について 1-4-2 言葉の獲得と考える能力の発達</p> <p>II - 2 学校側の事前準備 II - 2-2 学校としての準備</p> <p>III - 2 友達づくり、居場所づくり III - 2-1 学級の児童生徒への働きかけ</p> <p>IV - 1 環境づくり IV - 1-1 学びの場づくり IV - 2-1 指導に関わる人々</p>

	<p>V - 1 授業づくりの基礎</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>V - 1 - 1 実態把握と目標設定</li> <li>V - 1 - 2 指導計画</li> <li>V - 1 - 3 評価</li> <li>V - 1 - 4 指導記録の方法</li> </ul> <p>V - 3 教科学習</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>V - 3 - 1 言葉の力と教科学習</li> <li>V - 3 - 2 授業づくり</li> </ul> <p>VI - 1 日本の学校・入試制度</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>VI - 1 - 1 日本の学校制度について伝えること</li> <li>VI - 1 - 2 入学試験について伝えること</li> </ul> <p>VII - 1 校内の連携</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>VII - 1 - 2 管理職からの支援</li> <li>VII - 1 - 3 職員間の連携</li> </ul> <p>VII - 2 学校外との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>VII - 2 - 1 日本語指導員との連携</li> <li>VII - 2 - 3 ボランティア団体、NPO、国際交流協会などの情報</li> </ul>
<p>項目選択の理由</p>	<p>【研修のねらい】</p> <p>研修のねらいは、教員経験のある日本語学級担当者として、①積極的に学習を組み立てること、②学級・学校内外の支援をコーディネートしていく意識を持ってもらうことである。</p> <p>【学力の保障を重視したい】</p> <p>子どもたちの進路と社会に出ていくことができる学力の育成ということを意識してもらうためのオリエンテーションとして、「将来につながる学力を育てる」の講義を中学校卒業後の現状と課題も含めて行う。</p> <p>【日本語学級担当者として実践力を伸ばしたい】</p> <p>日本語担当者として「日々の授業を通して学力を育てる」ための実践報告と演習を行う。</p> <p>【コーディネーターの役割も自覚してほしい】</p> <p>コーディネーターとして、職員や外部のボランティアをつなぐ役目を担うことをめざす。</p>

(2) 全体計画

この研修を全体で何回行うか、各回の研修形態、内容・方法をどのようにするか、講師は誰に依頼するか、そして評価をどのようにするかといった点について決定します。

回数	研修形態	対象	内容・方法・講師・評価
研修 1	講義とグループワーク		<p>内容：外国人児童生徒の学力と進路の実態</p> <p>VI-1-1 日本の学校制度について伝えること</p> <p>VI-1-2 入学試験について伝えること</p> <p>V-3-1 言葉の力と教科学習</p> <p>方法：講義とグループワーク</p> <p>時間：2回（各1時間30分）</p> <p>講師：大学教員</p> <p>評価：事後アンケート</p>
研修 2	実践報告と講義	都道府県内の小・中学校の日本語学級担当教員（経験3・4年）	<p>内容：日本語の指導法・教科指導、演習</p> <p>V-1-1 実態把握と目標設定</p> <p>V-1-2 指導計画</p> <p>V-1-3 評価</p> <p>V-1-4 指導記録の方法</p> <p>V-3-1 言葉の力と教科学習</p> <p>V-3-2 授業づくり</p> <p>方法：実践報告と研究協議</p> <p>時間：2回（各1時間30分）</p> <p>講師：小中学校の日本語学級教員</p> <p>評価：振り返りとアンケート</p>
研修 3	講義と演習		<p>内容：学びの場づくりと学校内外の連携、研修のまとめ</p> <p>IV-1-1 学びの場づくり</p> <p>IV-2-1 指導に関わる人々</p> <p>VII-1-2 管理職からの支援</p> <p>VII-1-3 職員間の連携</p> <p>VII-2-1 日本語指導員との連携</p> <p>VII-2-3 ボランティア団体、NPO、国際交流協会などの情報</p> <p>方法：講義・演習</p> <p>時間：2回（各1時間30分）</p> <p>講師：大学教員・小中学校の日本語学級教員</p> <p>評価：振り返りとアンケート</p>

### (3) 研修プログラムの作成

各回の研修プログラム例を以下に示します。

#### ① 研修1のプログラム例

時間配分	内容	研修形態	備考
5分	趣旨説明と講師紹介		項目選択の理由などを参考に趣旨説明を行う。
約1時間 30分	「将来につながる学力を育てる」ことについて、日本語指導にとどまらず、教科指導を積極的に取り入れることの大切さを中学校卒業後の現状と課題も含めて行う。	講義 講師（大学教員）	小中学校の日本語学級担当教員合同で、児童生徒の将来を展望した学力を育てることの重要性と現状、課題について講義する。
約1時間	講義の内容を踏まえて、各学校での指導の現状や課題等をグループに分かれて話し合う。	グループワーク 自分の学級についてのワークシートの記入	どの参加者も意見を言えるように、4～5人くらいのグループで話し合う。記録・発表者を決めておく。
30分	グループでの話し合いの共有と質疑	応答形式	グループワークで出た課題やよい対応法などを共有する。また、講師への質問があれば受ける。
10分	振り返り・アンケート記入	個人	

## ② 研修2のプログラム例

時間配分	内容	研修形態	備考
5分	趣旨説明と講師紹介		項目選択の理由などを参考にして趣旨説明を行う。
約1時間 30分	「日々の授業を通して学力を育てる」ことを考えたJSLカリキュラムの実践報告を行う。	講義 講師（小中学校日本語 学級担当教員）	報告の中に「日常会話能力」「学習言語能力」「言葉の獲得」「考える力」などの内容を盛り込む。
約1時間	小中学校に分かれて、JSLカリキュラムの考え方を取り入れた指導案（略案）を立てる。	演習	児童生徒の実態、日本語の習得状況を設定し授業の目標と手立て（支援）を記入できるワークシートを用意する。
30分	グループでの話し合い、共有	各自の作成した授業案をもとにグループで話し合う。	個に応じた目標の設定や手立て（支援）の工夫について焦点をあてるよう、話し合いのポイントを示す。
10分	振り返り・アンケート記入	個人	

## ③ 研修3のプログラム例

時間配分	内容	研修形態	備考
5分	趣旨説明と講師紹介		項目選択の理由などを参考にして趣旨説明を行う。
約1時間 30分	「学校内や外部の支援をつなぐ」コーディネーターとして、教職員間や外部のボランティアをつなぐことについての講義と、実際に行なっている小中学校教員の実践報告を行う。	講義 （大学教員・小中学校 日本語学級教員）	小・中学校教員だけでなく、支援団体のスタッフを講師に招き、講義や報告をしてもらってもよい。
約1時間	自分の学校で「学びの場づくり」「指導者・管理職・職員間の連携」「ボランティア団体、NPO、国際交流協会等との連携」を行なっている例や「情報」があれば共有できるように話し合う。	グループワーク	自分の学校（学級）の問題点を把握し、本日の研修で取り入れられる解決策を書けるようにする。発表者を決めておく。
30分	グループでの話し合いの共有と質疑	応答形式	グループワークで出た課題やよい対応法などを共有する。また、講師への質問があれば受ける。
10分	振り返り・アンケート記入	個人	研修全体の振り返りと、今回の振り返りができるようにする。

## 2. プログラム作成例2—集住地域における教員研修

### (1) 実態把握と企画・立案

1 現状把握	地域の特性	<p>①集住地域であり、児童生徒の受入れの実績があり、かつ、この教育のモデルとなるような多くの児童生徒が在籍する学校も数校ある。ただ、同じ地域にあっても学区の特性は多様であり、集住型・分散型が混在しており、受入れの状況も学校間での格差が目立つ。</p> <p>②南米系の児童生徒が多数だが、日本生まれの児童生徒が増加している。最近ではフィリピン・中国等アジアからの入国も増加している。来日当初は短期就労が目的であっても、定住志向に変わった家族も多い。</p> <p>③親子間においても、言語・文化が異なりコミュニケーションに支障をきたしている家族も少なくない。</p> <p>④地域として受入れに関する経験は長く外部支援団体の活動も活発であるが、市全体として変化しつつある現状に対応しているとは言い難い。</p> <p>⑤指導者の意識・資質・経験もさまざまであり、一部のベテラン教員の他は、指導初任者がほとんどである。担当者以外の教員の関心は必ずしも高くない。</p>
	ニーズ	<p>①市全体としての外国人児童生徒教育の方向性を確認し共有すること。</p> <p>②所属している学校の地域の特性・外国人児童生徒の実態・リソース等、基本的な情報を収集するとともに、実態に応じた体制づくりができるようなノウハウを知り、校内外の体制を整えること。</p> <p>③個々の外国人児童生徒に適切な指導ができるようにするための担当者の資質・授業力を向上させること。</p> <p>④担当者以外の教員への啓発を行うこと。</p>
	地域のリソース	国際交流協会、日本語支援関係 NPO 団体、ボランティア団体、大学、外国人保護者会など
2 企画立案	研修の位置づけ	市の教員の専門研修（教育研究会「外国人児童生徒研究部」研修）
	受講対象者	市内小中学校教員 各校校務分掌における外国人児童生徒教育担当者（日本語学級担当者・在籍学級担任・教科担任等）
	研修回数・時間	年間3回程度（第1回2時間、第2回4時間、第3回2時間）
	その他	外部講師を招聘する謝金等は可能。
3 研修項目の選択	<p>検索項目 項目一覧から、「日本語学級担当者」「教員経験あり」で、◎印を選択した。</p> <p>※赤の項目が研修内容になる。</p>	<p>1-1 施策／受入れの歩みと現状</p> <p>1-1-3 担当者の役割</p> <p>1-1-4 外国人児童生徒教育の重要性</p> <p>1-2 「子ども理解」のために</p> <p>1-2-1 外国人児童生徒の母国・母文化について</p> <p>1-2-2 生育歴／学習歴</p> <p>1-3 児童生徒との関係づくり</p> <p>1-3-1 児童生徒の行動とその背景</p> <p>1-3-2 児童生徒に接する姿勢</p> <p>1-3-3 支援の必要性と意義</p> <p>1-3-4 日本人児童生徒への働きかけ</p>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>I - 4 外国人児童生徒にとって「日本語で学ぶ」とは             <ul style="list-style-type: none"> <li>I - 4-1 日常会話と学習言語能力について</li> <li>I - 4-3 言葉の獲得と考える力の発達</li> </ul> </li>   <li>II - 2 学校側の事前準備             <ul style="list-style-type: none"> <li>II - 2-2 学校としての準備</li> <li>II - 2-3 学級としての準備</li> </ul> </li>   <li>III - 2 友達づくり・居場所づくり             <ul style="list-style-type: none"> <li>III - 2-1 学級の児童生徒への働きかけ</li> <li>III - 2-2 編入した児童生徒への働きかけ</li> </ul> </li>   <li>III - 3 簡単な意思表示ができるように             <ul style="list-style-type: none"> <li>III - 3-1 「サバイバル日本語」指導の目的</li> </ul> </li>   <li>IV - 2 指導の体制づくり             <ul style="list-style-type: none"> <li>IV - 2-1 指導に関わる人々</li> </ul> </li>   <li>V - 1 授業づくりの基礎             <ul style="list-style-type: none"> <li>V - 1-1 実態把握と目標設定</li> </ul> </li>   <li>V - 2 日本語指導             <ul style="list-style-type: none"> <li>V - 2-1 日本語指導の基本</li> </ul> </li>   <li>V - 3 教科学習             <ul style="list-style-type: none"> <li>V - 3-1 言葉の力と教科学習</li> <li>V - 3-2 授業づくり</li> </ul> </li>   <li>VII - 1 校内の連携             <ul style="list-style-type: none"> <li>VII - 1-1 学級担任との連携</li> <li>VII - 1-2 管理職からの支援</li> </ul> </li>   <li>VII - 2 学校外との連携             <ul style="list-style-type: none"> <li>VII - 2-3 ボランティア団体、NPO、国際交流協会などの情報</li> </ul> </li> </ul>
<p>項目選択の理由</p>	<p>【研修のねらい】          初任者及び一般の教員が多数参加することが想定されるため、外国人児童生徒教育の基本的な知識や情報の提供を大きなねらいにする。</p> <p>【子どものおかれた状況の把握と関係づくり】          教員が自分の固定した枠や基準で外国人児童生徒をみるのではなく、子どもの状況や文化間移動をする子どもの発達特性など考慮する必要があることを研修で学んでもらう。</p> <p>【日本語指導と教科指導の基本について】          外国人児童生徒への日本語指導と教科指導の基礎は押さえるようにする。</p> <p>【学校内外の連携について】          教員研修では、直接担当する教員には学級担任との連携、学級担任であれば日本語学級担当教員との連携がなぜ必要かの理解を図るようにする。また、学校にはボランティアが関わるが多いため、外部組織や人との連携についてもその必要性と連携の仕方について学習する。</p>

(2) 全体計画

この研修を全体で何回行うか、各回の研修形態、内容・方法をどのようにするか、講師は誰に依頼するか、そして評価をどのようにするかといった点について決定します。

回数	研修形態	対象	内容・方法・講師・評価
研修 1	講義 (質疑応答を含む)	一般教員 日本語学級担当教員 初任者	<p>内容：外国人児童生徒の実態と学校での受入れ、サバイバル日本語指導について</p> <p>I-1-3 担当者の役割 I-1-4 外国人児童生徒教育の重要性 I-2-1 外国人児童生徒の母国・母文化について I-4-3 言葉の獲得と考える力の発達 II-2-2 学校としての準備 II-2-3 学級としての準備 III-2-1 学級の児童生徒への働きかけ III-2-2 編入した児童生徒への働きかけ III-3-1 「サバイバル日本語」指導の目的</p> <p>方法：講義 時間：2時間(1時間20分の講義に引き続き、質疑30～40分)、 質疑の時間をとるようにしたい。 講師：外国人児童生徒教育の先進校の担当教員 評価：事後アンケート</p>
研修 2	講義 ワークショップ	一般教員 日本語学級担当教員、 初任者	<p>内容：授業づくり</p> <p>V-1-1 実態把握と目標設定 V-2-1 日本語指導の基本 V-3-1 言葉の力と教科学習 V-3-2 授業づくり</p> <p>方法：①講義(1時間) 講師：大学教員、または外国人児童生徒教育の先進校のベテランの指導者 ②ワークショップ(2時間) グループに分かれて、 具体的課題(指導案の作成、教材の作成、学習支援の方法など)をもとに活動を行う。</p> <p>時間：3時間 評価：事後アンケート</p>
研修 3	講義 (質疑応答を含む)		<p>内容：連携</p> <p>VII-1-1 学級担任との連携 VII-1-2 管理職からの支援 VII-2-3 ボランティア団体、NPO、国際交流協会などの情報</p> <p>方法：講義 時間：1時間30分 講師：先進校のベテラン指導者、ないし先進校の管理職 (NPOや他機関で活動している人も) 評価：事後アンケート</p>



### (3) 研修プログラムの作成

各回の研修プログラム例を以下に示します。

#### ① 研修1のプログラム例

時間配分	内容	研修形態	備考
5分	趣旨説明と講師紹介		項目選択の理由などを参考にして趣旨説明を行う。
約80分	外国人児童生徒の実態と学校での受入れ時の留意点、受入れの際に配慮すべきこと、言葉の獲得と考える力の発達など、担当者が知っておくべき基本的な内容について、事例などを交えて講義を行う。	講義	大学教員を講師とする場合には、地域の特性、研修参加者の構成（初任者かどうかなど）、さらに講義のねらいを丁寧に伝えておきたい。
40分	質疑	応答形式	時間によって幅を持たせる
10分	振り返り・アンケート記入	個人	

#### ② 研修2のプログラム例

時間配分	内容	研修形態	備考
10分	趣旨説明と講師紹介		項目選択の理由などを参考にして趣旨説明を行う。
約1時間	外国人児童生徒のための日本語の授業、教科の授業づくりについて、実際の事例などをもとに講義を行う。対象者のニーズに合わせて日本語指導に力点を置くか、教科指導に力点を置くかをはっきりさせておく。	講義	先進校で実践をしている教員を講師に依頼し、できるだけ具体の実践に即した講義を依頼する。
約2時間	グループに分かれて、具体的な課題（指導案の作成、教材の作成、学習支援の方法など）をもとに活動を行う。	ワークショップ	グループごとにファシリテーターを置く。ワークショップでは、課題を明示し、共有することが必要である。そのためには、教科、単元などを具体的に示し、指導案の作成や支援などについて話し合うようにする。
40分	振り返り	応答形式	時間によって幅を持たせる
10分	アンケート記入	個人	

### ③ 研修3のプログラム例

時間配分	内容	研修形態	備考
5分	趣旨説明と講師紹介		項目選択の理由などを参考にして趣旨説明を行う。
約80分	外国人児童生徒教育における連携の課題について講義を行う。学校内での連携と学校外との連携について、必要性だけでなく、実際の事例をもとに、問題や課題などについて講義をする。	講義	連携について、受講者に事前のアンケートを行うといい。その結果を講師に知らせておくこと講義が円滑に進む。講師には、先進校のベテラン指導者や先進校の管理職を依頼する。また、視点を変えて、NPOや他機関で活動している人に依頼することもよい。
20分	質疑	応答形式	時間によって幅を持たせる
10分	振り返り・アンケート記入	個人	

### 3. プログラム作成例3—集住地域における管理職研修

ここでは、集住地域の管理職研修のプログラム作成例を示します。

#### (1) 実態把握と企画・立案

1 現状把握	地域の特性	<p>①集住地域であり、児童生徒の受入れの実績があり、かつ、この教育のモデルとなるような多くの児童生徒が在籍する学校も数校ある。ただ、同じ地域にあっても学区の特性は多様であり、集住型・分散型が混在しており、受入れの状況も学校間での格差が目立つ。</p> <p>②南米系の児童生徒が多数だが、日本生まれの児童生徒が増加している。最近ではフィリピン・中国等アジアからの入国も増加している。来日当初は短期就労が目的であっても、定住志向に変わった家族も多い。</p> <p>③親子間においても、言語・文化が異なりコミュニケーションに支障をきたしている家族も少なくない。</p> <p>④地域として受入れに関する経験は長く外部支援団体の活動も活発であるが、市全体として変化しつつある現状に対応しているとは言い難い。</p> <p>⑤指導者の意識・資質・経験もさまざまであり、一部のベテラン教員の他は、指導初任者がほとんどである。担当者以外の教員の関心は必ずしも高くない。</p>
	ニーズ	<p>①市全体としての外国人児童生徒教育の方向性を確認し共有すること。</p> <p>②所属している学校の地域の特性・外国人児童生徒の実態・リソース等、基本的な情報を収集するとともに、実態に応じた体制づくりができるようなノウハウを知り、校内外の体制を整えること。</p> <p>③個々の外国人児童生徒に適切な指導ができるようにするための担当者の資質・授業力を向上させること。</p> <p>④担当者以外の教員への啓発を行うこと。</p>
	地域のリソース	国際交流協会、日本語支援関係 NPO 団体、ボランティア団体、大学、外国人保護者会など
2 企画立案	研修の位置づけ	校長会課題別グループ研修
	受講対象者	市内小中学校長
	研修回数・時間	年間6回のうちの1回 2時間
	その他	
3 研修項目の選択	<p>検索項目 項目一覧から、「日本語学級担当者」「教員経験あり」で、◎印を選択した。</p> <p>※赤の項目が研修内容になる。</p>	<p>1-1 施策／受入れの歩みと現状</p> <p>1-1-3 担当者の役割</p> <p>1-1-4 外国人児童生徒教育の重要性</p> <p>1-2 「子ども理解」のために</p> <p>1-2-1 外国人児童生徒の母国・母文化について</p>

	<p>I - 4 外国人児童生徒にとって「日本語で学ぶ」とは I - 4 - 3 言葉の獲得と考える力</p> <p>II - 1 児童生徒と保護者の日本語の力 II - 1 - 1 日本語ができない保護者への対応</p> <p>II - 2 学校側の事前準備 II - 2 - 1 受入れの手続き II - 2 - 2 学校としての準備 II - 2 - 3 学級としての準備</p> <p>IV - 2 指導の体制づくり IV - 2 - 1 指導に関わる人々</p> <p>VII - 1 校内の連携 VII - 1 - 1 学級担任との連携 VII - 1 - 4 日本語学級担当者との連携</p> <p>VII - 2 学校外との連携 VII - 2 - 3 日本語指導員との連携</p>
<p>項目選択の理由</p>	<p>【研修のねらい】 集住地域といっても、校区によってはまったく知識や情報のない学校もあるため、外国人児童生徒教育の基本的な知識と情報を提供するようにする。</p> <p>【研修内容の選択にあたって】 管理職研修では、時間が限られているため、内容を焦点化して講義形式を中心としながらも、各校の実情を振り返り今後の見通しがもてるような内容を選択する。</p>

(2) 全体計画

回数	研修形態	対象	内容・方法・講師・評価
研修	校長会課題別 研修グループ	校長	<p>内容：外国人児童生徒の実態と学校での受入れを中心にする。</p> <p>I-1-3 担当者の役割 I-1-4 外国人児童生徒教育の重要性 I-2-1 外国人児童生徒の母国・母文化について I-4-3 言葉の獲得と考える力 II-1-1 日本語ができない保護者への対応 II-2-1 受入れの手続き II-2-3 学級としての準備 II-2-2 学校としての準備 IV-2-1 指導に関わる人々 VII-1-1 学級担任との連携 VII-1-4 日本語学級担当者との連携 VII-2-3 日本語指導員との連携</p> <p>方法：講義、時間：約 90 分、講師：大学教員 (情報交換を含む) 評価：事後アンケート</p>

(3) 研修プログラムの作成

① 研修 1 のプログラム例

時間配分	内容	研修形態	備考
5 分	趣旨説明と講師紹介		項目選択の理由などを参考に趣旨説明を行う。
約 45 分	外国人児童生徒の実態と学校での受入れ時の留意点、受入れの際に配慮すべきこと、言葉の獲得と考える力の発達、学校内の連携など、管理職が知っておくべき基本的な内容について講義を行う。	講義	講師には地域の特性、参加者の実態、本講義のねらいを丁寧に伝えておく。
約 5 分	質問		講義について質疑を行う。質問が出やすいよう具体的な項目ごとに質問があるかどうかを確認する。
約 30 分	各校の実情・今後の見通しについて情報交換		出席者が多い場合は、グループに分かれて行う。ただし、小・中学校一緒にグループで行い、課題等を共有したい。外国人児童生徒が多く在籍する学校の校長からまず簡潔に情報提供を求める。
10 分	振り返り・アンケート記入	個人	

## 4. プログラム作成例 4—集住地域の校内研修

### (1) 実態把握と企画・立案

1 現状把握	地域の特性	<p>①県内は外国人集住地域で、民間が運営するブラジル人学校もある。市内のほとんどの学校では、外国人児童が在籍する。しかしながら、地域の特性は多様であり、受入れの状況には学校間格差も大きい。日本語学級が設置されている学校もあり、JSL児童が担当教員や指導助手、巡回相談員等から日本語指導や学習支援を受けているが、まだまだ十分とは言えない現状がある。</p> <p>②本校は、外国人児童の多数在籍校である。南米系の児童生徒が多数だが、インドネシア・中国等のアジア圏からの入国もある。また、日本生まれの外国人児童や両親の一方が日本国籍を有する児童もあり、日本語力に課題をもつ児童は多い。そのため、日本語学級を設置し、取り出し形式での指導をおこなっている。</p> <p>③地域として受入れに関する経験は長く、多文化共生の社会を目指して活動をしている地域の協議会等がある。永住を希望する外国人家庭もある。</p>
	ニーズ	<p>①JSL教育の方向性を全校教職員で確認し共有すること。</p> <p>②各学級等で、個々のJSL児童に適切な指導ができるようにするため、教員の資質・授業力を向上させること。</p>
	地域のリソース	国際交流協会、日本語支援関係NPO団体、ボランティア団体、大学など
2 企画立案	研修の位置づけ	校内研修（小学校）
	受講対象者	在籍学級担当者（管理職を含む全教員）
	研修回数・時間	年間3回（1回は90分程度。2回は3時間程度。3回は1時間程度） 1学期・夏休み・3学期 が望ましい。
	その他	外部講師を招聘する謝金等は5000円程度なら可能。
3 研修項目の選択	<p>検索項目 項目一覧から、「日本語学級担当者」「教員経験あり」で、◎印を選択した。</p> <p>※赤の項目が 研修内容になる。</p>	<p>1-1 施策／受入れの歩みと現状</p> <p>1-1-3 担当者の役割</p> <p>1-1-4 外国人児童生徒教育の重要性</p> <p>1-2 「子ども理解」のために</p> <p>1-2-1 外国人児童生徒の母国・母文化について</p> <p>1-2-2 生育歴／学習歴</p> <p>1-3 児童生徒との関係づくり</p> <p>1-3-1 児童生徒の行動とその背景</p> <p>1-3-2 児童生徒に接する姿勢</p> <p>1-3-3 支援の必要性と意義</p> <p>1-3-4 日本人児童生徒への働きかけ</p> <p>1-4 外国人児童生徒にとって「日本語で学ぶ」とは</p> <p>1-4-1 日常会話と学習言語能力について</p> <p>1-4-3 言葉の獲得と考える力の発達</p>

	<p>III - 2 友達づくり、居場所づくり  III - 2 - 1 学級の児童生徒への働きかけ  III - 2 - 2 編入した児童生徒への働きかけ</p> <p>III - 3 簡単な意思表示ができるように  III - 3 - 1 「サバイバル日本語」指導の目的</p> <p>V - 3 教科指導  V - 3 - 1 言葉の力と教科学習</p> <p>VI - 2 児童生徒の将来  VI - 2 - 1 進路と職業選択</p> <p>VII - 1 校内の連携  VII - 1 - 3 職員間の連携</p>
<p>項目選択の理由</p>	<p>【研修のねらい】</p> <p>①校内の全教職員で外国人児童の情報を共有することの必要性・重要性を再確認する。</p> <p>②在籍学級担任が JSL 児童を念頭に置いた教科学習の授業づくりや教材作りを学ぶ機会を作る。</p>

## (2) 全体計画

回数	研修形態	対象	内容・方法・講師・評価
研修 1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・講義</li> <li>・グループワーク (質疑応答を含む)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・在籍学級担任 (全職員)</li> </ul>	<p>内容：外国人児童生徒教育の重要性と児童生徒理解について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Ⅰ-1-3 担当者の役割</li> <li>Ⅰ-1-4 外国人児童生徒教育の重要性</li> <li>Ⅰ-2-1 外国人児童生徒の母国・母文化について</li> <li>Ⅰ-2-2 生育歴／学習歴</li> <li>Ⅰ-3-1 児童生徒の行動とその背景</li> <li>Ⅰ-3-2 児童生徒に接する姿勢</li> <li>Ⅰ-4-1 日常会話と学習言語能力について</li> <li>Ⅰ-4-3 言葉の獲得と考える力の発達</li> </ul> <p>方法・時間：講義 45分、グループワーク 45分 講師：教育委員会外国人児童生徒教育担当指導主事または、外国人児童生徒教育の経験者 評価：事後アンケート</p>
研修 2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・講義</li> <li>・ワークショップ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・在籍学級担任 (全職員)</li> </ul>	<p>内容：在籍学級担任に向けた教科学習指導について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>V-3-1 言葉の力と教科学習</li> <li>V-3-2 授業づくり</li> </ul> <p>方法・時間：講義 80分、ワークショップ 100分 講師：大学教員 評価：振り返り・事後アンケート</p>
研修 3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループワーク</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・在籍学級担任 (全職員)</li> </ul>	<p>内容：校内での職員間の連携について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>VII-1-3 職員間の連携</li> </ul> <p>方法：講義、グループワーク 時間：60分 講師：教育委員会担当指導主事または、外国人児童生徒教育の経験者 評価：事後アンケート</p>



### (3) 研修プログラムの作成

各回の研修プログラム例を以下に示します。

#### ① 研修1のプログラム例

時間配分	内容	研修形態	備考
5分	趣旨説明と講師紹介		項目選択の理由などを参考にして趣旨説明を行う。
40分	外国人児童生徒教育の重要性と子ども理解について、事例を交えながら講義を行う。	講義	教職経験年数の少ない教員も多いため、具体例を盛り込んだ講義になるように依頼する。
20分	講義の内容を踏まえて、各学級に在籍しているJSL児童の現状や課題について情報交換し、現在、担任が抱えている課題などについて話し合う。	グループワーク	低・中・高学年の3つのグループに分かれ、話し合う。講師は3つのグループを移動しながら、話し合いを傍聴する。
15分	グループでの話し合いを全体で共有する。講義についての質問を行う。講師からの助言や感想をもらう。	応答形式	記録・発表者を決めておく。
10分	振り返り・アンケート記入	個人	

#### ② 研修2のプログラム例

時間配分	内容	研修形態	備考
5分	趣旨説明と講師紹介		項目選択の理由などを参考にして趣旨説明を行う。
75分	在籍学級での教科学習や授業づくりについて、JSLカリキュラムの実践例を中心に具体的な講義を行う。	講義	授業実践や教材紹介などを取り入れた内容の講義になるように依頼する。
90分	講義の内容を踏まえて、グループで与えられた教科・単元について話し合い、授業案を作成する。 ポスターセッション形式で発表し、支援の方策等を交流しあう。 講師からの意見や助言をもらう。	ワークショップ	あらかじめ教科・単元を設定しておき、4～5人のグループ分けをしておく。
10分	アンケート記入	個人	

### ③ 研修3のプログラム例

時間配分	内容	研修形態	備考
5分	趣旨説明と講師紹介		項目選択の理由などを参考にして趣旨説明を行う。
50分	職員間の連携の意義や必要性について講師から講義を受けた後、グループに分かれ、児童の情報交換や、1年間の取り組みの成果と課題について話し合う。	講義 グループワーク	低・中・高学年の3つのグループに分かれ、話し合う。
5分	振り返り・アンケート記入	個人	

## 5. プログラム作成例5－教育委員会主催の「日本語指導員」養成のための研修

### (1) 実態把握と企画・立案

1 現状把握	地域の特性	<p>①全体では分散地域だが、一部南米系の日系人（ブラジル人・ペルー人・ボリビア人）の集住しているところもある。また、最近ではフィリピン、タイ、中国などのアジア系で、両親の一方が日本国籍を有する児童生徒の割合が増えている。</p> <p>②市教育委員会が、母語支援者を学校に週1～3回程度派遣する支援や児童生徒の多くが在籍する小中学校に加配教員を配置する取り組みを約30年間継続している。</p>
	ニーズ	<p>①日本語指導員と学校との連携が必要である。</p> <p>②滞在年数が長い児童生徒や日本で生まれ育った児童生徒の学力の保障と進路についての要望が強い。</p> <p>③サバイバル日本語や教科につながる日本語（JSLカリキュラム）の視点に基づいた授業の組み立て方についての要望がある。</p>
	地域のリソース	<p>(1) 支援者の役割</p> <p>①母語支援者（母語による日本語指導講師）は、滞在年数1～2年程度の児童生徒を対象に、母語と日本語で日本語と学校のきまりを教えることと、保護者への通訳・翻訳文書の作成が役割である。</p> <p>②日本語ボランティア（日本語による日本語指導者）は、滞在年数2年以上の児童生徒を対象に、日本語で「学習で使う言葉」を教えるという役割である。</p> <p>(2) 連携できる組織・機関、専門家</p> <p>①初期日本語指導教室（市教育委員会所属） 母語による指導者が、来日直後の児童生徒を対象に、2ヶ月間集中して、サバイバル日本語やひらがな・カタカナなどを教える。</p> <p>②国立大学法人 外国人児童生徒の多数が在籍している小・中学校に設置されている「日本語指導教室」担当教員の研修などを開いている。</p> <p>③市国際交流協会 日本語ボランティアの養成・派遣などを行っている。</p>
2 企画立案	研修の位置づけ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・市教育委員会による、日本語指導員のためのスキルアップ講座</li> <li>・市国際交流協会との連携による日本語指導者養成講座</li> </ul>
	受講対象者	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語指導者（母語による日本語指導者、日本語による日本語指導者）</li> </ul>
	研修回数・時間	年に3回程度。各回、2～3時間。
	その他	外部講師を招聘する謝金等は5000円程度なら可能。
3 研修項目の選択	<p>1.対象者のうち、日本語指導員に注目する。</p> <p>2.項目一覧から◎の項目を選択</p> <p>3.ついで○の項目を選択</p> <p>※赤の項目が研修内容になる。</p>	<p>1-1 施策／受入れの歩みと現状</p> <p>1-1-1 これまでの施策の歩み</p> <p>1-1-3 担当者の役割</p> <p>1-2 「子ども理解」のために</p> <p>1-2-1 外国人児童生徒の母国・母文化について</p> <p>1-2-2 生育歴／学習歴</p>

	<p>I - 3 児童生徒との関係づくり  I - 3 - 1 児童生徒の行動とその背景  I - 3 - 2 児童生徒に接する姿勢</p> <p>I - 4 外国人児童生徒にとって「日本語で学ぶ」とは  I - 4 - 3 言葉の獲得と考える力の発達</p> <p>III - 1 学校生活を知る  III - 1 - 3 学校のきまり</p> <p>III - 3 簡単な意思表示ができるように  III - 3 - 1 「サバイバル日本語」指導の目的</p> <p>V - 1 授業づくりの基礎  IV - 1 - 1 実態把握と目標設定  IV - 1 - 2 指導計画</p> <p>V - 2 日本語指導  V - 2 - 1 日本語指導の基本  V - 2 - 2 授業づくり</p>
<p>項目選択の理由</p>	<p>【研修のねらい】</p> <p>日本語指導員への的確な情報提供と支援の基本的な視点を提示する。また、日本語指導員に学校との連携を図るために、実際の指導と日本語指導について取り上げる。</p> <p>①受入れの基本的な情報を提供する。</p> <p>②JSL 児童生徒への支援の基本的な視点を押さえることが必要である。</p> <p>③日本語指導員にとって、教科につながる日本語（JSL カリキュラム）の視点に基づいた授業の組み立て方の基本的な考え方を習得させたい。</p>

(2) 全体計画

回数	研修形態	対象	内容・方法・講師・評価
研修 1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 講義</li> <li>・ 情報交換</li> <li>・ グループ活動</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本語指導員 (ただし、日本語学級 担当者を入れても可)</li> </ul>	<p>内容：日本語指導員が支援にあたり必要な視点を示す。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>I-1-1 これまでの施策の歩み</li> <li>I-1-3 担当者の役割</li> <li>I-2-1 外国人児童生徒の母国・母文化について</li> <li>I-2-2 生育歴／学習歴</li> <li>I-3-1 児童生徒の行動とその背景</li> <li>I-3-2 児童生徒に接する姿勢</li> <li>I-4-3 言葉の獲得と考える力の発達</li> <li>III-1-3 学校のきまり</li> </ul> <p>方法：講義と情報交換 時間：1時間 30分 講師：大学教員、または外国人児童生徒教育の経験者 評価：ワークシート（具体例が必要）</p>
研修 2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 講義</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日本語指導員 (ただし、日本語学級 担当者を入れても可)</li> </ul>	<p>内容：日本語指導、授業づくりの基本的な視点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>III-3-1 「サバイバル日本語」指導の目的</li> <li>V-1-1 実態把握と目標設定</li> <li>V-1-2 指導計画</li> <li>V-2-1 日本語指導の基本</li> <li>V-2-2 授業づくり</li> </ul> <p>方法：講義（これまで実際に日本語指導や教科指導をしてきた教員、指導者から、具体の事例を通して、講義を行う。ただ、日本語指導に力点を置くか、教科指導に力点を置くかは、1回目のアンケートやニーズから判断する。） 時間：1時間 40分 講師：日本語学級に長年携わってきた教員等 評価：アンケート</p>
研修 3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ワークショップ</li> <li>・ 話し合い</li> <li>・ 個人の振り返り</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本語指導員 (ただし、日本語学級 担当者を入れても可)</li> </ul>	<p>内容：外国人児童生徒支援者をともに支援していくことについて－1年間の振り返り</p> <p>方法：情報交換、ワークショップ 時間：1時間 40分 講師：日本語学級に長年携わってきた教員等 評価：アンケートとワークシート ※ワークシートは次年度の引継ぎ資料作成も兼ねている</p>

(3) 研修プログラムの作成

① 研修1のプログラム例

時間配分	内容	研修形態	備考
5分	市教委担当者紹介と事務連絡 趣旨説明		項目選択の理由などを参考にして趣旨説明を行う。
45分	外国人児童生徒に関わる視点について講義を行う。特に、日本語指導員であっても、日本語だけでなく児童生徒の生活背景の理解、母語・母文化の果たす役割、日本語の習得と認知発達との関連などについての内容について講義する。	講義	教職経験年数の少ない教員も多いため、具体例を盛り込んだ講義になるように依頼する。
30分	講義をもとに、担当する児童生徒についての情報交換を行う。できれば、自分の取組の課題を設定できるようにしたい。ただし、経験が浅い支援者には、情報交換で、多様な視点から児童生徒に接することができるようにすることを目指す。	日本語指導員同士、また日本語学級担当者がある場合は、両者による情報交換を中心にする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・講義で聞いた視点を参考にしながら、話をすすめていくようにする。</li> <li>・ただし、年度の初めなので、児童のことが把握できていない場合も多い。その場合は、目に見える行動から、考えられる背景を多面的にみられるようにする。</li> </ul>
10分	振り返り 担当児童の大まかな教育課題の記入 (ワークシート)	各ペア	

## ② 研修2のプログラム例

時間配分	内容	研修形態	備考
5分	研修の趣旨説明		項目選択の理由などを参考に趣旨説明を行う。
50分	日本語指導、授業づくりの基本的な視点の習得を目指すようにする。 日本語指導員で経験がなかったり、地域のニーズがあつたりする場合は、サバイバル日本語についても、基本的な目的や指導法について取り上げる。 また、教科につながる日本語（JSLカリキュラム）の視点に基づいた授業の組み立て方の基本的な考え方を習得する。ただし、日本語指導員が中心のため、具体例や実践例をもとに講義を行うようにする。	講義 地域の小中学校日本語学級担当教員、日本語指導員を講師にする。特に、これまで実際に日本語指導や教科指導を実際に行ってきた教員、支援者から、具体の事例を通して、講義を行うようにする。	小・中学校教員だけでなく、支援団体のスタッフを講師に招き、講義や報告をしてもらってもよい。
30分	特定のテーマ、教科・単元を決めて、実際の授業でどのような支援が必要かを明確にすることを目標にする。 講義を受けて、講義で取り上げた教科・単元などを実際の支援対象児童生徒に当てはめた場合、どのような支援が必要かといった視点をあらかじめ決めておくのも一案である。	ワークショップ グループ活動 支援対象に応じて、小学校、中学校別に分かれて活動を行うようにする。	議論しやすい雰囲気づくりをする。前半の講師に、各グループからの質問に答えてもらうようにする。また、可能な限りグループを回ってもらい、適宜指示をしてもらうようにする。
10分	アンケート記入	個人	

### ③ 研修3のプログラム例

時間配分	内容	研修形態	備考
5分	研修の趣旨説明		日本語指導員の実践的力量的向上のため、自らの実践を振り返ることの重要性を説明する。
10分	ワークショップの進め方についての説明		ワークショップを効果的に進めるには、事前の説明が不可欠である。事前に、3～4の事例を用意し、その事例をもとに進めることを話す。
50分	3～4のグループに分かれ、事前に用意した事例をもとに、ワークショップを行う。最初に事例報告を行う。報告も事前にどのような視点で行うかを明確にしておく（この点については、依頼しておくこと）。 グループ間でその児童生徒の実態や具体の支援について話し合い、それをまとめるようにする。	ワークショップ	いくつかのグループを作り、ある事例をもとに、児童生徒の行動をどう考え、どのように指導していくかを考える。 ※グループごとに異なる事例を用意する。 ※20分は参加者全体で共有する時間にする。
30分	まとめをもとに、実際に担当する児童生徒についての支援の振り返りを行う。	グループ活動	日本語指導員は担当が変わる可能性があるため、ワークシートに記入しながら振り返りを行い、次年度への引継ぎの資料作成も兼ねる。 ※ワークシート
10分	ワークシートの記入	個人	



## 6. プログラム作成例6—分散地域における日本語指導担当者（教員・指導員）研修

### (1) 実態把握と企画・立案

1 現状把握	地域の特性	分散地域で言語・文化的背景としては中国（帰国者関係・ビジネス・留学生）、最近ではフィリピンルーツが増えている。市内には多くの留学生を持つ大学がありその家族も住んでいる地区がある。モスクもありモスリムを日常的に見かけるところもある。また、日本語学級を持つ学校があり、外国人児童生徒受入れに関する経験の蓄積はある程度はある。
	ニーズ	日本語指導員が派遣される初期指導後はどのように児童生徒を支援できるのか難しい状態である。日本語学級をもつ加配校であってもそのうち、核となれる学校は4校程度である。日本語学級を初任者が担当になっているところもあり、児童生徒支援のための研修が必要とされている。また、よりよい補完関係が構築できるように教員と日本語指導員にも同様に研修が必要である。
	地域のリソース	日本語支援者（教育委員会の派遣日本語指導員）、ボランティア教室、連携できる組織・機関などがある。
2 企画立案	研修の位置づけ	JSL 担当者研修、教育課題別研修
	受講対象者	学校種別（中学校、小学校）職能（日本語学級担当者、在籍学級担任、日本語指導員）経験年数（初任、1～2年、3年以上）
	研修回数・時間	1回90分
	その他	
3 研修項目の選択	<p>検索項目</p> <p>1. 項目一覧から、「日本語学級担当者」の、◎印を選択した。</p> <p>2. 具体的指導場面を中心に選択した。</p> <p>※赤の項目が研修内容になる。</p>	<p>Ⅲ - 1 学校生活を知る</p> <p>Ⅲ - 1 - 2 日程・時程・行事について</p> <p>Ⅲ - 1 - 3 学校のきまり</p> <p>Ⅲ - 2 友達づくり、居場所づくり</p> <p>Ⅲ - 2 - 1 学級の児童生徒への働きかけ</p> <p>Ⅲ - 2 - 2 編入した児童生徒への働きかけ</p> <p>Ⅲ - 3 簡単な意思表示ができるように</p> <p>Ⅲ - 3 - 1 「サバイバル日本語」指導の目的</p> <p>V - 1 授業づくりの基礎</p> <p>V - 1 - 1 実態把握と目標設定</p> <p>V - 1 - 2 指導計画</p> <p>V - 2 日本語指導</p> <p>V - 2 - 1 日本語指導の基本</p>

	<p>V - 3 教科指導  V - 3 - 1 言葉の力と教科学習</p> <p>VII - 1 校内の連携)  VII - 1 - 1 学級担任との連携  VII - 1 - 2 管理職からの支援</p> <p>VII - 2 学校外との連携  VII - 2 - 1 日本語指導員との連携</p>
項目選択の理由	<p>【研修のねらい】</p> <p>日本語学級担当者と支援者に、初期指導について事例を交えて講義を行う。時間が少ないため、講義内容を焦点化する必要がある。</p>

(2) 全体計画

回数	研修形態	対象	内容・方法・講師・評価
研修 1	専門研修、 または 課題別研修	日本語学級担当教員 ※一般教員も参加可 日本語指導員	<p>内容：日本語の指導法、初期指導  III - 3 - 1 「サバイバル日本語」指導の目的  V - 1 - 1 実態把握と目標設定  V - 1 - 2 指導計画  V - 2 - 1 日本語指導の基本  V - 3 - 1 言葉の力と教科学習</p> <p>方法：講義  講師：地域の経験のある教員、または地域の経験のある日本語指導員  評価：事後アンケート</p>

### (3) 研修プログラムの作成

#### ①研修1 - 研修時間が約60分の作成例

時間配分	内容	研修形態	備考
5分	趣旨説明と講師紹介		研修目的を明確にし、初期日本語指導を中心に行うことをあらかじめ話をしておく。
約25分	日本語指導員による外国人児童生徒教育の日本語の指導法と初期指導の講義	経験のある日本語指導員を講師にし、活動例について報告してもらう。	事前に受講者にアンケートをとり、聞きたいことや疑問点を把握し、それをもとに講師に依頼するようなことができればいい。
約25分	教員による外国人児童生徒教育の日本語の指導法と初期指導の講義	経験のある日本語学級担当教員から、同様に活動をもとに報告してもらう。	
5分	質疑（上記の講師の間でも質疑・フロアーから質疑）	応答形式	時間によって幅を持たせる
10分	振り返り・アンケート記入	個人	

②研修2－研修時間が90分×2で実施する場合のプログラム例

時間配分	内容	研修形態	備考
5分	趣旨説明と講師紹介		研修目的を明確にし、初期日本語指導を中心に行うことをあらかじめ話しておく。
約1時間	日本語指導員による外国人児童生徒教育の日本語の指導法と初期指導の講義 教員による外国人児童生徒教育の日本語の指導法と初期指導の講義	経験日本語指導員による講義（活動例報告）  経験日本語学級担当講義	事前に受講者にアンケートをとり、聞きたいことや疑問点を把握し、それをもとに講師に依頼するようなことができればいい。
10分	質疑	応答形式	時間によって幅を持たせる

時間配分	内容	研修形態	備考
約40分	経験教員と日本語指導員の混成グループをいくつかつくる。 指導時の問題点を5つ以内あげ、その問題を共有化する。 同じような問題についてどのように指導しているか紹介（→困っているものについてグループで一つとりあげ、どのようにすればいいか考える）	演習 進行役・発表役を決めて始める。	事前に受講者にアンケートをとり、自分が直面している問題点を5つ以内書き出してもらう。 時間によってはグループで核となる経験教員が発表者になる
10分	振り返り・アンケート記入	応答形式	時間によって幅を持たせる

## 7. プログラム作成例7—日本語担当初任者研修

### (1) 実態把握と企画・立案

1 現状把握	地域の特性	地域は特定しない。
	ニーズ	日本語学級担当者は比較的異動が激しく、常に「担当初任者」が存在するが必ずしも申し送りが十分に行われてはいない。そのため、担当になっても何をしたらよいか、指導をどう考えたらよいかなど戸惑うことが多く、外国人児童生徒教育に関わる基礎的な情報が求められている。
	地域のリソース	大学、日本語教育機関、NPO
2 企画立案	研修の位置づけ	自由参加型研修（オープン研修）
	受講対象者	外国人児童生徒教育の経験が浅い担当者（教員、日本語指導員等）、指導主事が中心
	研修回数・時間	2回×3時間（終日研修×1回でも可）
	その他	
3 研修項目の選択	<p>検索項目</p> <p>1. 項目一覧から、「日本語学級担当者」「教員経験あり」「日本語担当3年未満」で、○○印を選択した。</p> <p>2. 「教員経験あり」の◎項目に注目した。</p> <p>※赤の項目が研修内容になる。</p>	<p>I - 1 施策／受入れの歩みと現状</p> <p style="padding-left: 20px;">I - 1 - 3 担当者の役割</p> <p style="padding-left: 20px;">I - 1 - 4 外国人児童生徒教育の重要性</p> <p>I - 2 「子ども理解」のために</p> <p style="padding-left: 20px;">I - 2 - 1 外国人児童生徒の母国・母文化について</p> <p style="padding-left: 20px;">I - 2 - 2 生育歴／学習歴</p> <p>I - 3 児童生徒との関係づくり</p> <p style="padding-left: 20px;">I - 3 - 1 児童生徒の行動とその背景</p> <p style="padding-left: 20px;">I - 3 - 2 児童生徒に接する姿勢</p> <p style="padding-left: 20px;">I - 3 - 3 支援の必要性と意義</p> <p style="padding-left: 20px;">I - 3 - 4 日本人児童生徒への働きかけ</p> <p>I - 4 外国人児童生徒にとって「日本語で学ぶ」とは</p> <p style="padding-left: 20px;">I - 4 - 1 日常会話と学習言語能力について</p> <p style="padding-left: 20px;">I - 4 - 3 言葉の獲得と考える力の発達</p> <p>II - 2 学校側の事前準備</p> <p style="padding-left: 20px;">II - 2 - 2 学校としての準備</p> <p style="padding-left: 20px;">II - 2 - 3 学級としての準備</p> <p>III - 2 友達づくり・居場所づくり</p> <p style="padding-left: 20px;">III - 2 - 1 学級の児童生徒への働きかけ</p> <p style="padding-left: 20px;">III - 2 - 2 編入した児童生徒への働きかけ</p> <p>III - 3 簡単な意思表示ができるように</p> <p style="padding-left: 20px;">III - 3 - 1 「サバイバル日本語」指導の目的</p> <p style="padding-left: 20px;">III - 3 - 1 指導の方法</p>

	<p>V-1 授業づくりの基礎 V-1-1 実態把握と目標設定</p> <p>V-3 教科学習 V-3-1 言葉の力と教科学習 V-3-2 授業づくり</p> <p>VII-1 校内との連携（校内の連携・学校外の連携） VII-1-1 学級担任との連携</p>
項目選択の理由	<p>【研修のねらい】</p> <p>「担当初任者研修」という位置づけから、目標を「担当者の役割を理解すること」「外国人児童生徒教育の基礎情報を得ること」と設定する。実際の指導方法については別の機会に「初任者」以外の担当者も含めた研修を持つことが望ましい。一方、担当者の中には教員としても初任であるケースが多いことから、選択した項目を扱う際にも具体的事例を示す必要がある。</p>

(2) 全体計画

回数	研修形態	対象	内容・方法・講師・評価
研修1	講義	日本語担当初任者	<p>内容：①外国人児童生徒教育の現状と担当者の役割 ②言葉の力と第二言語の習得</p> <p>方法：講義 講師：大学教員 評価：アンケートによる</p>
研修2	事例報告 分科会	日本語担当初任者	<p>内容：日本語担当者の仕事の実際</p> <p>方法：担当経験者による報告、 少人数グループでのディスカッション</p> <p>講師：日本語学級担当教員（経験者） 評価：アンケートによる</p>

### (3) 研修プログラムの作成

#### ① 研修1のプログラム例

時間配分	内容	研修形態	備考
5分	趣旨説明と講師紹介		・研修の目的を明確に伝えると共に、各受講者が自身の持つ課題を整理する時間を確保するとよい。
90分	外国人児童生徒教育の現状と担当者の役割 <ul style="list-style-type: none"> <li>・外国人児童生徒教育の重要性</li> <li>・担当者の役割</li> <li>・子どもの多様性（子どもの母国・母文化、生育歴・学習歴）</li> <li>・指導に当たって（児童生徒の行動とその背景、児童生徒に接する姿勢、子どもへの働きかけ、学級担任との連携）</li> <li>・質疑応答</li> </ul>	講義	
60分	外国人児童生徒の言葉 <ul style="list-style-type: none"> <li>・日常会話と学習言語能力</li> <li>・言葉の獲得と考える力の発達</li> <li>・質疑応答</li> </ul>	講義	
10分	振り返り・アンケート記入	個人	

#### ② 研修2のプログラム例

時間配分	内容	研修形態	備考
10分	趣旨説明と講師紹介		・研修の目的を明確に伝えると共に、各受講者が自身の持つ課題を整理する時間を確保するとよい。
45分	日本語学級担当者の経験を聞く <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本語学級の経営</li> <li>・具体的な指導</li> <li>・校内の体制づくり</li> </ul>	報告	・経験5年程度の、初任者の気持ちがわかるような講師が望ましい。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・可能であればポイントを絞った報告を複数の講師から聞けるとよい。</li> </ul>
120分	経験者を囲んで（課題や情報の共有）	少人数分科会	・分科会の編成は職能別、学校種別、混成などがある。
10分	アンケート記入	個人	

## 8. プログラム作成例 8 – 『外国人児童生徒受入れの手引き』を活用した管理職研修

ここでは、文部科学省が刊行した『外国人児童生徒受入れの手引き』を活用した研修例を示します。管理職の場合、通常は研修時間が限られており、通常 60 分、多くても 90 分です。2つを想定した研修プログラム例を示します。この手引きの該当箇所をコピーして資料として使うことが可能です。この手引きが手元にない場合は、文部科学省の次のサイトからダウンロードが可能です。

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/clarinet/002/1304668.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/1304668.htm)

### 【1回 60 分の場合】

- ①原則、講義形式として、担当する指導主事が行うか、あるいは、その地域の実情に詳しい大学教員等を講師にして行う。

---

- ②『外国人児童生徒受入れの手引き』1章「外国人児童生徒多様性への対応」の2「外国人児童生徒の多様な背景」を参考にして、自分の地域の外国人児童生徒数を示す。数と同時に、どの程度日本語指導を必要とする児童生徒がいるかの基本的な情報を示すことで、その地域の実態を紹介する。

---

- ③これまでその地域で、外国人児童生徒教育、ないし日本語指導に関してどのような施策を行ってきたかを簡単に紹介する。年表等があればわかりやすい。

---

- ④手引きの1章の4「外国人児童生徒が直面する課題」を示す。  
この手引きでは、「学校への適応・居場所の確保」「『学習するための言語能力』の習得」「学力の向上」「かけがえのない自分をつくりあげていくこと」「新たな課題（母語・母文化の保持、進路の問題、不就学）」の5つの観点から課題が示されている。ただし、その地域で実態調査や学校からの実践報告などがある場合には、それらをもとにした方がより地域の実態の即した内容になる。ここで、事例などを交えるとより理解しやすくなる。

---

- ⑤管理職研修の場合、手引きの2章「学校管理職の役割」が中心になる。時間配分も全体の3分の2程度をあてるようにする。具体的な内容と流れは次の通りである。
  - ・11頁で全体の流れ（6つの流れになっている）を把握するとともに、管理職にはこの6つの視点が必要なことを示す。
  - ・外国人児童生徒数が少ない場合は、1「温かい面接を工夫する」、2「担任を交え、保護者との信頼関係を築く」、4「児童生徒の成長を担任と見守る」、5「全教職員で取り組む体制をつくる」に絞る。特に、4「児童生徒の成長を担任と見守る」、5「全教職員で取り組む体制をつくる」を中心にして説明する。
  - ・児童生徒数が多い場合は3の日本語指導についても加える。



## 【1回 90分の場合】

① 60分の研修プログラム例で示した内容を講義形式で行う。

### ② 事例報告の場合

次に、外国人児童生徒が在籍する学校の校長から事例報告をしてもらう。

事例報告の視点を示すようにすると、内容理解が進み、議論が発展しやすくなる。

事例報告の視点は以下の4点である。

- ① 受入れ上の課題－外国人児童生徒の受入れにあたっての問題点と課題
  - ② 学習指導・生徒指導上の課題－学校での指導上の困難な点、現在抱えている問題
  - ③ 学校全体の体制づくり－学校全体で指導する際の課題
  - ④ 地域との連携について－支援員、ボランティア、NPOなどとの連携の実態と課題
- その後、この4点にそって、参加者との意見交換を行う。

### ③ ワークショップの場合

- ① 外国人児童生徒を受入れた時の問題を5つまで挙げる。その問題を共有化する。(KJ法の活用)
- ② 問題の原因について話し合う。(進行役、発表役を決める。)
- ③ 各学校に応じた解決方法、解決できない事項を各自整理する。
- ④ 時間によって発表者を数人に絞る。(在籍の多い学校)

### 【用意するもの】

- ① 文科省の手引きのコピー
- ② 当該地域の施策の略図・統計数字(できるだけ簡潔にする。)
- ③ 実践事例の学校の資料(負担にならないようにしたいが、資料は用意してもらう。)

